

題目 習慣解凍と環境配慮的な行動様式の定着
～容器入り飲料削減のためのマイボトル利用促進に関する研究～

氏名 鈴木晴香

指導教官 大沼進

近年、環境問題に対する意識が高まる中で、3Rと呼ばれる環境に配慮した行動様式が注目されている。この3R行動の一環である「マイボトルの利用促進」を題材として本研究を行った。環境配慮行動研究では、人々の環境問題解決に非協力的な習慣行動を解凍し協力的な習慣行動を形成することは、重要なながらも難しい問題とされている。そのため本研究では、容器入り飲料の利用という習慣行動の解凍と、マイボトルの利用という習慣行動の形成を目的とした。そして、習慣変更に有効と考えられる複数の条件を設け、条件間で参加者の習慣行動の変化に差がみられるかを検討した。

実験期間は連続した3ヶ月間で、参加者には実験開始時にマイボトルを無料で配布し、実験期間中、実験終了後もそのまま譲渡した。習慣変更に関する条件は4つ設け、参加者をいずれかの条件に振り分けた。条件は Group discussion (GD) 条件、Self commitment (SC) 条件、レクチャー (LEC) 条件、統制 (Cntl) 条件であった。実験開始時、実験開始時から2週間後、1ヶ月後、3ヶ月後と計4回、質問紙に回答してもらい、最終質問紙回答時以外で各条件の操作を行った。

その結果、条件間でマイボトルの利用や、容器入り飲料の購入・利用、習慣などの行動変数には有意な効果が見られなかったものの、どの条件の参加者でもマイボトルを定期的に利用し、容器入り飲料の利用量も減少した。

また行動変数や行動意図、非意図に影響を与える変数を検討した結果、条件間に差が見られた。GD条件では、容器入り飲料の入手容易性といった実行可能性評価や、マイボトル利用の面倒さや容器入り飲料の便利さといった費用便益性評価に影響を受けておらず、SC条件では、マイボトルの利用制約性といった実行可能性評価や、多くの人がマイボトルを使っておらず容器入り飲料を買っているという記述的規範の影響を受けていなかった。またGD, SC条件では、容器入り飲料を買わないようにしようという意図が容器入り飲料の利用に影響を与えていた。これらの結果から、Group discussion や Self commitment を行ったことで、マイボトルの利用や容器入り飲料の利用に関して、周囲の環境や、マイボトルの不便さや容器入り飲料の便利さ、他者の行動などからマイナスの影響を受けず、また容器入り飲料の利用に関しては意図と行動の結びつきが強くなったことが示された。